



R08.9.1

子どもの発達を支える協働アプローチ ～教育・福祉・家庭がワンチームになるために～

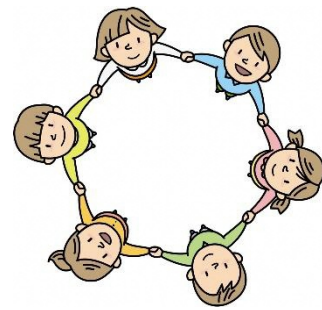


京都教育大学 総合教育臨床センター
学びサポート室

公認心理師・臨床心理士 榊原久直

sakakiha@kyokyo-u.ac.jp

ちょっと立ち止まって、語り合おう



子どもの“こころ”と“からだ”の成長のために、
私たち大人（支援者や保護者）に必要な役割や態度
（こうなってほしい/こうならないといけないと思っていること）
はどんなことですか？

・

・

・

こころとからだの“成長”の2つの側面

1905年に知能検査が開発されて以降…

いわゆる“知能(≡認知機能)”が人間の健康な人生を予測する大きな指標として扱われてきた

《従来の教育観・子育て観》



2000年にJames Heckmanがノーベル経済学賞を受賞後…

“知能検査で測定できない能力≡非認知機能”こそが、

(例:感情をコントロールする力,人間関係を形成・維持する力,共感性や思いやり
目標に向かって粘り強く計画的に挑戦する力,折れない柔軟な心の強さ)

大人になってからの経済的安定性を含めた,社会的適応性
や心身の健康を予測するものとして注目を集め始めている

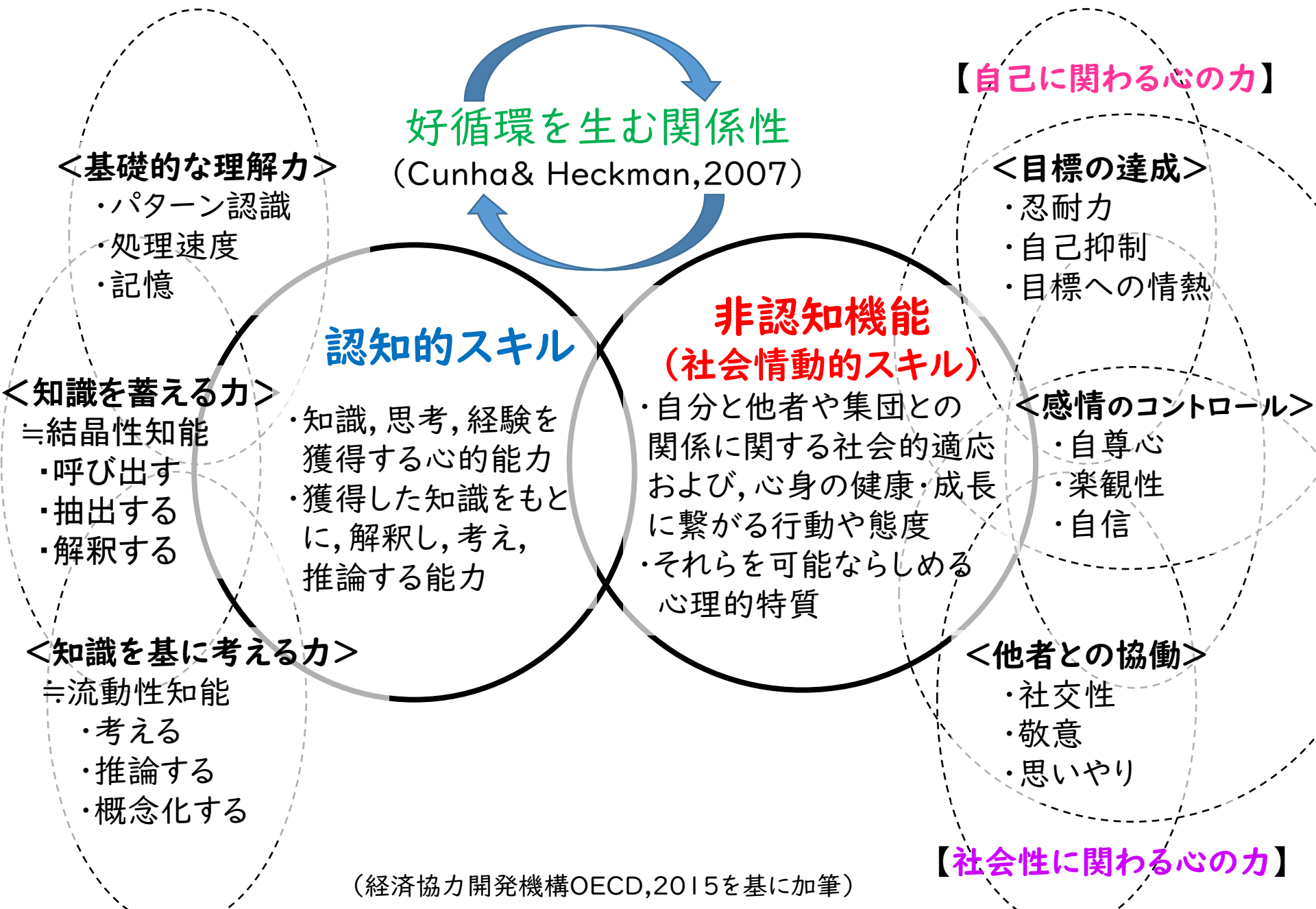
(※非認知機能≡社会情動的スキル)

《新しい教育観・子育て観》

⇒そしてこの力(の両方)を育むために必要なものが

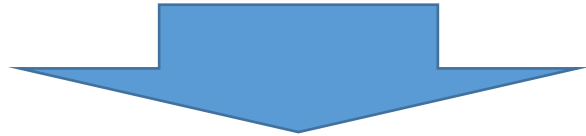
“安定した愛着関係”と子どもの“主体的な活動”である

“2つ力”に含まれる能力とそれらの関係性



子どもの2つの力を育む大人側の能力や態度とは

子どもにころがある信じ、子どもの心身の発達状態に概ね適したやり取りや手助けをしてくれる子どもにとっての“特別な他者”が身近にいるということが、古くから重要であると考えられてきた。



その中でも最も重要なものとして注目されているものは…

80年の“アタッチメント（愛着）”研究の中で

“子どもの視点から物事を見ること”

(see things from the child's point of view)

が重要なものであると考えられるようになってきている

次の写真に登場する子どもの
セリフを考えてみてください



子どものSOSのサインとしての“発達特性”



子どもの視点に立つための工夫

【特性の変動性について】

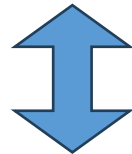


子どもたちの抱える身体の特徴(≡障害特性)は常に一定ではない

⇒ (楽しくても, 不安でも) 感情や興奮がたかぶると, それに呼応する形で, 特性や症状がより色濃くなる

例: 何かにこだわりだす, 独り言 (エコラリア) が増える
そわそわが大きくなる, より衝動的になる,
遊びをコロコロ変える, 質問を何度も繰り返す
体の一部を動かし続ける

⇒それが原因となって, 不適切な行動が生じるリスクがUP!



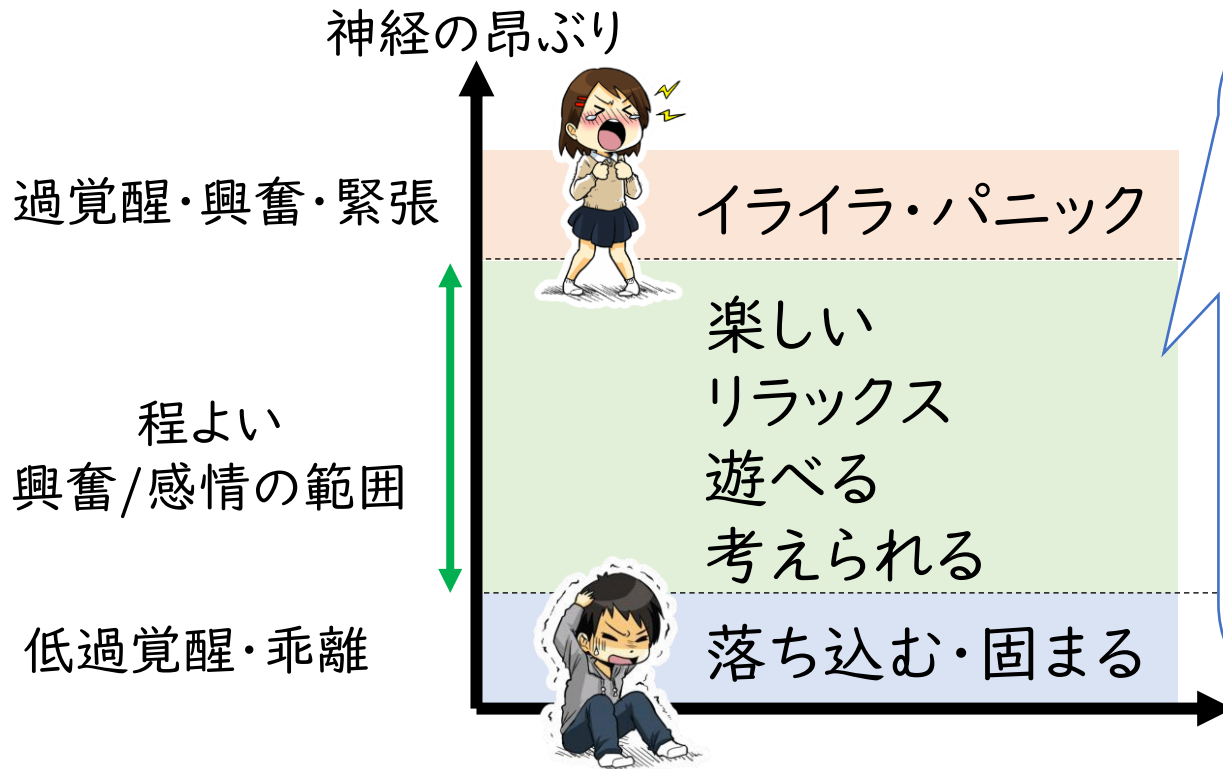
⇒ “困っているサイン”として理解するチェックのポイントになりうる!

～「やめなさい」ではなく, 「どうしたの?」と尋ねよう～

⇒そのケアができれば, 子どもも支援者側も,

安心感・安全感が保たれ, 持っている力が発揮しやすくなる!

興奮度のバロメーターを意識することの有効性 (ポリヴェーガル理論より)



【ワンポイント】
昂ぶりをイメージし
“(興奮を)調整する支援”や
“タイミングを待つ支援”
ができるかどうかで
互いの苦しさは
大きく変わる!

【ワンポイント】

“症状”や“障害特性”は高まり/鎮まり過ぎた際に色濃くなる傾向がある
➡相手が“困った”言動をする際、それをSOSのサインとして理解し
「どうしたの?」と立ち止まることが非常に重要となる!(子ども・保護者も)

ワーク①：“障害特性”を分類してみよう

以下の14個の困難さを“障害”毎に分類してみよう

※診断基準には必ずしも含まれないものが1つだけ含まれます

①コミュニケーションの困難さ

③微細協調運動における困難さ

⑤こだわり

⑦多動性

⑨粗大運動における困難さ

⑪衝動性

⑬学習面の困難さ

②不注意

④共感性における困難さ

⑥感覚の特異性

⑧反復運動

⑩集団適応力における困難さ

⑫睡眠リズムにおける困難さ

⑭言語発達の困難さ

自閉スペクトラム症 (ASD) :

注意欠如多動症 (ADHD) :

限局性学習症 (SLD) :

発達性協調運動症 (DCD) :

その他 :

解説：“障害特性”を分類してみよう

- ①子どもたちの持つ“診断名”や“傾向”を把握すること
 - +
 - ②そこから推察される“障害特性”を把握すること
- 

メリット1

：不適応行動の（連鎖）リスクを予測することが可能になる！

+

メリット2 （※効果的な個別対応）

：子どもが“困り出した”瞬間に気づいて、早期に支援することが可能になる！

+

メリット3 （※合理的配慮, 基礎的環境整備, インクルーシブな場づくり）

：子どもが“困る前”に、困りづらい環境を調整可能になる！

“発達障害”の特性のチェックポイントを教えてくれる検査本

【MSPA】

「発達障害の要支援度評価尺度」

【概要】

多彩な症候を呈し、個人差も大きい発達障害者の要支援度を特性格別に9段階評価し、図示

DSM5における重症度分類に対応

level1 level2 level3

臨床域

* 特性チャート *

年 月 日

1	2	3	4	5
気になる点はない	多少気になる点はあるが、通常の生活環境において困らない	本人の工夫や、周囲の多少の配慮で集団生活に適応(上司、担任など責任ある立場の人が把握し配慮する程度)	大幅な個別の配慮で集団生活に適応(上司、担任等の支援のみでは困難)	集団の流れに入るより、個人がより快適な生活を送れるような支援が優先される

赤点線外がサポートの参考ラインです

得意分野、特技とその程度

限局性
学習症

DQ or IQ

全体:
動作性:
言語性:

その他の特記
すべき事項

ADHD

コミュニケーション

言語発達

学習

睡眠リズム

衝動性

多動

不注意

微細協調運動

集団適応力

共感性

こだわり

感覚

反復運動

粗大運動

運動症

自閉
スペクトラム



“障害特性”を深掘りする①

障害特性を抱えるということは、どういう“事情”を抱えるなのだろうか？

～ASD特性～

- ①コミュニケーションの困難さ：相手の言葉の意図が理解しづらい…
自分の意図を伝えづらい…
- ④共感性における困難さ：気持ちが汲みづらい…、気持ちを伝えづらい…
- ⑤こだわり：“いつもと同じ”・“イメージ通り”が崩れるとザワザワする…、
人と自分の興味が違い過ぎる…、わかってもらえない…
- ⑥感覚の特異性：“普通”の刺激が自分には痛すぎる…
“普通”の刺激が自分には足らなく感じる…
- ⑧反復運動：なんだか〇〇をしていると安心する…
〇〇をしていないとなんとも居心地が悪く感じる…
- ⑩集団適応力における困難さ：“みんな”という感覚がピンとこない…
(暗黙の)ルールがわかりづらい…
ルールが柔軟であることが気持ち悪い…
- ⑭言語発達の困難さ：自分の考えや思いを言葉にすることが難しい…
相手の言葉の理解が難しい

“障害特性”を深掘りする②

障害特性を抱えるということは、どういう“事情”を抱えるなのだろうか？

～ADHD特性～

②不注意：やる気が出ない…, 集中できない…

気を付けているのにどうしても抜け落ちる…(後で凹む…)

集中したいのに不要なものに目が留まる…(後で凹む…)

何をしたらいいか分からなくなる…

⑦多動性：どうしても体がソワソワ・ムズムズする…

体でストレスをコントロールしたい…

⑪衝動性：気持ちや興奮をコントロールできない…(後で凹む…)

自分で意図する前に反射で行動してしまう…(後で凹む…)

～SLD特性～

⑬学習面の困難さ：特定の学習（読み・書き・計算・聞く・話す・推論する）だけ
何度やっても、どうしてもよくわからない…

形や文字が理解しづらい, 歪んでいる, 書けない…

でもそんな苦しみを誰も気づいてくれない…

「どうせ自分には無理だ…」

“障害特性”を深掘りする③

障害特性を抱えるということは、どういう“事情”を抱えるなのだろうか？

～DCD特性～

- ③微細協調運動における困難さ：手指を思い通りに動かせない…
目と手, 両手, 手足を上手く連動できない…
タイミングとかコツをつかみにくい…
「僕・私には難しい…, できない…」
- ⑨粗大運動における困難さ：どうやっても大きく強くしか体が動かない…
姿勢を保つのが難しい, しんどい, 疲れる…
「僕・私には難しい…, できない…」

～睡眠障害特性～

- ⑫睡眠リズムにおける困難さ：寝たくても寝れない…
起きていたくても意識が保てない…
睡眠不足で気持ちや集中が不安定…
- ➡神経がすり減り, 他の障害特性の状態が疑似的に生じる

子どもの抱える“事情”を体験しよう



子どもの抱える事情を踏まえた支援の考え方

子どもたちの抱える様々な発達特性といった事情を考慮して、私たち支援者は様々なサポートをしてあげたいと願っている。

…けれども、そう願うだけでは実際にどのようなサポートをしてあげたらよいのかがわからない。

⇒ 実際にどのような支援を行えばよいのかの考案の仕方としては

- ① 子どもの抱える事情を自分自身で体験してみる
 - ② 子どもの抱える事情やその人生を自分で想像してみる
 - ③ 支援者同士でアイデアや経験を共有し合う
(本や論文の情報を活用することも含む)
 - ④ 保護者にこれまで編み出してきた工夫を尋ねる
 - ⑤ 子ども自身に尋ねたり, 子どもと一緒に考える
- といった、様々な方法がある。



<動画を見て体験しよう>

外からの刺激の受け取り方や処理の仕方に
難しさのある子どもの世界を体験してみよう





<動画を見て体験しよう>

自分の注意や身体のコントロールが困難な
子どもの世界を体験してみよう



子どもの体験世界を考える ～体の扱いの困難さ～



<姿勢保持の困難さ>

:椅子に座って活動する全ての時間を,椅子型ダイエット器具のようにグラつく椅子の上でするような日々...

<肘,手首,手指の操作の困難さ>

:あらゆる活動場面で,腕～手先にかけての各部位が操作しづらい,もしくは連動しづらい状態すごす日々...

※疑似体験は,以下のように筆記用具などの持ち方を変えると体験できます



身体の操作に全般的な困難さがある場合



手首と手指が上手く使えず,肘だけが使える場合



手指が上手く使えず,手首と肘が使える場合



手指,手首,肘がそれぞれ使える場合

子どもの体験世界を考える ～体の扱いの困難さ：ペア用～

<以下の字のなぞり書きorノートに書写してみよう>

- (1) 一定のリズムと強さで身体かイスを揺らされながら・・・
- (2) 不規則なリズムと強さで身体か椅子を揺らされながら・・・

揺る

揺る

子どもの体験世界を考える

～知的発達／ASD的なコミュニケーションのすれ違い～

<物事を理解し、表出すること全般の困難さ>

そもそも知的発達症とは…

全般的知能の障害があり、その年齢で期待される適応機能の欠陥・不全が生じ、家庭や学校、職場等の日常生活に困難を生じるもの。

知能(intelligence)とは

- ①「適応力」：新しい場面や困難な問題に直面したとき、本能的な方法によらずに、適切かつ有効なしかたで、順応したり解決したりする能力を知能とみなす。
- ②「高等な知的能力」：抽象的思考力、推理力、洞察力などを指し、言語や記号などを用いて、概念のレベルで思考を進める能力を知能とみなす。
- ③「学習能力」：知識や技能を経験によって獲得することを可能にする能力を知能とみなす。



このスライドで理解したことを英語でまとめるように指示されたら、どのような体験になるだろうか？

“特別”な支援と発達の機会の“保障”





<動画を見て体験しよう>

◎理解の発展, このクイズにチャレンジ

様々な困難さを乗り越える方法を,
生み出そう!



子どもへの支援について考える

子どもたちの発達特性を踏まえた“支援”というと、多くの人が専門知識に基づく“特別な”支援を思い浮かべがちである。

…けれども、先ほどのワークで編み出した通り、もしくは想像した通り、子どもたちへの支援は必ずしも、特別な知識が無ければ生み出せないものではなく、また、〇〇障害の人に特有な何かを体験を提供するだけではないということに気づくことができる

⇒だとすれば特別支援は…

①子どもの抱える事情を想像・体験することで発見できる工夫・裏技

～合理的配慮・ちょっとした支援～

②〇〇障害の特性が無ければ得られたであろう“当たり前”の体験を守り、それを提供することも立派な特別支援であること

～発達の機会や経験の“保障”～

といったものでもあるかもしれない。

子どもの“特徴”を踏まえた支援のヒントの探し方

「〇〇(特性の名前や診断名)」&「合理的配慮」などから、学校園や支援機関で行われている支援・配慮の具体例を調べてみよう
+ 当事者や家族が書いている書籍・エッセイなども参考に



発達に凸凹のある子どもに関わる支援者向けに作成した、支援・教材資料や事例等のデータベースサイト。800字くらいの短い記事が中心で、今日明日から実践できるヒントを届けます。

※発達特性の疑似体験ワーク動画もありますので職員研修でどうぞ

不注意さや多動性・衝動性のある子どもに対して、家や学校で工夫してあげられることの具体例が沢山書かれた一冊



何気なく使っている声掛けを、子どもにより効果的に届くようにするための工夫が沢山詰まった一冊



子どもの不適応的な行動や学習場面での困難に対して、全国の教員・保育士から寄せられた対応策3300以上を問題・困難さごとに整理した資料集



「特別支援」と「インクルーシブな実践」①

一人ひとりに応じた支援

その子の特性やニーズに応じて、必要な配慮・調整・専門的支援を行う

保育・教育・療育など、さまざまな場で、その子が安心して参加し、力を発揮しやすくなるように、個別の配慮や調整、専門的な支援を行う考え方です。



1 その子を理解する



発達や特性、興味や困りごとを丁寧に理解する

2 個別に配慮・調整する



方法や手順、場や教材を、その子に合わせて工夫する

3 専門性を活かす



必要に応じて、専門職や個別の支援計画につなげる

4 家庭・関係機関と連携する



家庭や医療・福祉・学校などと協力し、継続して支える



「その子には何が必要か」を考え、安心して参加し、できることや自信が育つように支えるのが、一人ひとりに応じた支援です。



「特別支援」と「インクルーシブな実践」②

インクルーシブな場づくり

みんなが参加しやすい
環境・活動・関わりをつくる

保育・教育・療育など、さまざまな場で、すべての子どもが安心して参加し、その場の一員として過ごせるように、環境や活動を整える考え方です。



1 多様性を前提にする



いろいろな子どもがいることを、
当たり前として考える

2 環境・活動を工夫する



遊び・学び・ルール・関わり方を、
みんなが参加しやすいように整える

3 つながりと所属感を育てる



「ここにいていい」「役割がある」と
感じられる場をつくる

4 みんなで支える



保護者・支援者・関係機関が協力して
場を支える

「この子をどう合わせるか」ではなく、「この場をどう参加しやすくするか」を考えるのが、
インクルーシブな場づくりです。

子どもの参加を支える2つの視点

まず場を整え、必要に応じて一人ひとりに応じて支える

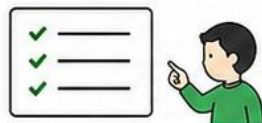
① インクルーシブな場づくり

みんなが参加しやすいように、環境・活動・ルール・関わり方を整える

見通しのある環境



わかりやすいルール



多様な参加方法



安心できる場



まず場を整える



- それでも参加しづらさが残るときは、一人ひとりに応じて支える
- 個別の工夫を、みんなが参加しやすい場づくりに還元する

工夫や知見を
場づくりに還元する

② 一人ひとりに応じた支援

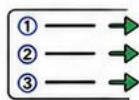
その子の特性やニーズに応じて、必要な支援を行う

この中には、性質の異なる2つの支援があります

A 配慮・調整による支援

日常の場面で、その子が参加しやすくなるように工夫する

手順の工夫



座席や場の調整



伝え方の工夫



補助機器の活用



B 専門性を活かした支援

より専門的・継続的に、その子の育ちや生活を支える

個別の支援計画



専門職との連携



個別指導



生活面の支援



ポイント

- 大きくは「場を整える」と「一人ひとりに応じて支える」の2つの視点。
- 「一人ひとりに応じた支援」の中には、「配慮・調整による支援」と「専門性を活かした支援」がある。
- 個別の支援で得られた工夫や知見を、場づくりに還元することで、より参加しやすい環境へと更新していく。
- どちらが大事ということではなく、どちらも大切に独立していない。



子どもの“特徴”を捉えつつ、支援者同士や、 保護者とのチームを作るための参考書



発達のアセスメントのプロセスと、
保護者や支援者との連携の具体例や
事例における会話や、その中での
対応のポイントを書いた入門書

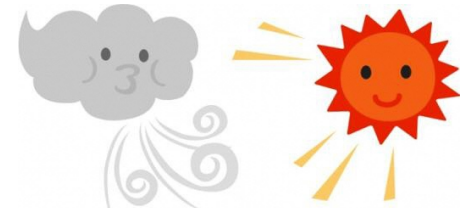
子育てという最も難しい営みを支えるために（私見）

子育ては誰もが無自覚的に子ども時代に経験し、また、誰からも何かを教わることなく体当たりで挑むことが多いものである。

また、多くの保護者が子どもの健やかな成長を願いつつ（愛しつつ）も、互いに安心感と安全感のある関係性を築けず日々苦心している。

私たちの日々の支援は、そうした人類史上最も大切な営みであると同時に、最も困難な営みに挑む保護者たちにとっての**安心の基地**であり、**安全な避難所**を提供することに他ならない。

親子関係において大切であるのと同じく私たち支援者も、育児を巡る**様々な感情のすべてに興味と敬意を示し**、時に**寄り添い**、時に**見守り**、時に**別の視点を提供**し、一緒に試行錯誤する仲間であろうと試みよう。



➤ 参考文献・オススメ資料

- ・榊原久直 他(2026)事例とQ&Aで学ぶ!スクールカウンセラーと教員のための発達支援入門.小学館
- ・崔 炯仁(2016)メンタライゼーションでガイドする外傷的育ちの克服.星和書店
- ・北川恵(2025)アタッチメントを学ぼう エピソードでつなぐ関係性の理解と支援.日本評論社
- ・ミッジリーら(2021)メンタライジングによる子どもと親への支援: 時間制限式 MBT-Cのガイド. 北大路書房
- ・藤本浩一・金網知征・榊原久直(2019)読んでわかる児童心理学.サイエンス社



【子どもの臨床研究会(こど研)】



子どもと親に関わる多職種と多機関の読書会/事例検討会

子どもや親を取り巻く環境は多様化し、子どもたちの抱える困難さは非常に複雑になってきています。また彼らを支える**保育士・教師・児童指導員・保健師・福祉士・心理士**・・・等、様々な支援者たちが支えあいながら、支援をすることが非常に大切な時代となってきています。

この活動ではそんな考えに基づき、発達凸凹や虐待の問題、精神疾患・疾病など、様々な困難さを抱える子どもやご家族、大人の支援に携わっている支援者たちが集まり、**Web上での読書会や座談会などを通して**、子どもや家族の支援について一緒に考え、学び、取り組むことを目指します。保育・教育、医療・福祉、心理など様々な立場から自由に意見を交換し、互いに支えあいながら、より良い支援を模索していけたらと願っています。

<2026年度の読書会の開催日時>

時間: 21時半～22時半頃(途中参加・退室可能)

※曜日は月の下旬の金曜日を主としていますが、月によっては週数や曜日が変更となる場合があります

場所: Web会議システム Zoom上にて
(※ビデオoffでOKです)

<2026年度のテーマと日程>

“**愛着関係**”の視点からの支援現場を捉え直そう

テキスト: 藤岡孝志 2020年 ミネルヴァ書房
『支援者支援養育論: 子育て支援臨床の再構築』

次回: 9月中～下旬の(金)に開催予定 ※第4章を使用

<参加資格者>

◎ 守秘義務を固く守れる方

(※個人情報保護に関する同意書を提出していただきます)

・子どもや家族、大人の支援に携わる支援者の方

・支援者を目指す大学生・大学院生

※大学生には個人情報の保護に関する説明を実施し、その上で入会を検討させていただきます。

<その他>

・参加費は無料です

・事例検討を希望される方は、随時日程を設定いたしますので、ご相談ください。

【問い合わせ】

ご関心、ご質問のある方は、子どもの臨床研究会事務局(sakakiha@kyokyo-u.ac.jp)までお気軽にお問合せください。**直近の回への参加希望者**や、**メーリングリストへの登録希望者**もこちらへご連絡ください。
(※それぞれの支援業務・活動が最優先ですので、読書会の途中の回からの参加や、欠席もご遠慮なくどうぞ)